

— 第百弐号 — (2008年夏号)

紫のゆかり、ふたたび — 源氏物語千年紀

源氏物語千年紀の今年、ドマーニ福岡でイベントが開かれます。ドマーニさんは、高級家具を東京をはじめ近くでは福岡で展示されています。時々福岡店を訪れて、セレブの世界を疑似体験しています。特に地下のホームシアターは圧巻で、好きな映画を独り占めすることができます。

今回は、フラワーアレンジメントデザイナー松尾真理子先生。創作屏風作家和田木乃実先生。造園設計施工株式会社別府梢風園。そしてしん窯青花匠橋口博之の饗宴をドマーニらしいインテリア空間として『源氏物語』千年紀の企画をされました。橋口は、福岡三越作陶展（8月26日～9月1日）や佐賀玉屋作陶展（9月16日～29日）を前にしてドマーニさんが応援して下さいるので、人一倍力が入っているようです。

先日、ドマーニさんから千年紀のポスター2枚をいただきましたが、イメージキャラクターとして去年の大河ドラマ風林火山でデビューした由布姫役の柴本幸ちゃん（私達は幸（ゆき）ちゃんと呼んでいます）がドアアップで写っていたので、不思議な縁を感じました。今工房の入口に大きなポスターをでーんと貼っています。凛とした彼女を見て、背筋が思わず伸びて、ますますやる気を奮い立たせています。



「インテリア空間と
 伝統美～源氏物語」

7月12日（土）
 ～21日（祝）
 ドマーニ福岡にて開催

故青木龍山先生の思い出

しん窯当主 梶原茂弘

小学校高学年の頃、母の勧めもあって青木先生の
図画教室に入門した。大きな図体に威圧感を感じた
が、にこにこ笑顔で声をかけて下さりほっとした
事が第一印象である。私は弟と同級生数人で先生の
門をたたくのが楽しくてしようがなかった。先生か
ら「茂弘君は油絵ばせんね。」と言われ、思わず「
持っています。」と答え、母を困らせた。来週日曜
日に油絵道具をかかえていかなければならない。
事情を母に説明して、即佐世保の画材屋さん買い
に連れて行ってもらった。日曜日初日の教室につじ
つまを合わせ、早速静物画にのぞんだ。真新しいキ
ャンバスに黒棒で輪郭を描き、おもむろにパレット
に油や絵の具をしぼって油絵に挑戦したのである。
1枚だけ当時の静物画で花と花瓶を題材にした絵を
大切に残しているが、青木先生と私の合作である。
くしくも花瓶が天目釉であり、現在天目の龍山と言われたゆえんであろうか。



当時の写真より（右側が私）

図画教室のスケッチ旅行の思い出は忘れる事ができない。白磁ヶ丘の写生、そして
夏休みは泊まり込みで多良岳の清流に入ったり、絵筆を握って山の緑や川の澄んだ流
れを写していたが、自然の中で伸び伸びと育ててもらった。外尾山の自宅に呼んで、
夏祭り見物の後は泊めていただいていた。先生の大きな身体の中にすっぽりと入り込
んで、まるでお相撲さんに抱かれているようで、すやすやと眠りに吸い込まれていっ
た。

当時、日展の初入選で喜んでおられる姿や、結婚される当時の幸せいっぱいのお福
分けが、幼心にビシバシと伝わってきた。私達は先生の教室のおかげで子供時代を素
直に元気に過ごす事ができた。

たまたま弟と同じ機関車の絵を描いた時、私はこぢんまりと真ん中に描き、弟は画
用紙をはみ出したように描き、力強さが伝わってきた。当然ながら先生の評価は弟が
断然高く、それ以来絵の方はあきらめて弟に任せてしまった。弟は今、九州産業大学
芸術学部美術学科教授として、芸術家の卵達を教えている。私はその後、窯元のおや
じとしての道を歩んだが、陶芸家ではなくて専ら職人さんをまとめたり育てたりする
仕事を天職とした。先生のおかげで、家族的な安らぎを享受できて何不自由のない子
供らしい生活を過ごしたわけである。

それから半世紀以上も経過してしまっただが、毎年どこかでお会いする機会も多く、
必ず気軽に気さくにお声をかけて下さり、気に留めていただいていた。先生の怒った
顔など見た事もないし思ってもみない。いつもふくよかな笑みを絶やさず平常心でお
付き合いをして下さった、人間味あふれる先生ともうお会いできないとは思えない。
先生と共同で描いた小学生時代の油絵を座敷に飾っておこうと思う次第である。

有田ニューセラミックス研究会 天草視察研修報告

私にとって5～6回目の天草陶石視察であり、業界の大不況の中で原材料会社とどのように向き合うか重要な課題を掲げながら緊張感を持って視察に臨んだ。今日に至るまではニューセラ研会長西山泰雄社長の行動力によるところが大きい。

香田陶土の香田社長の講演。そして河口教授（窯大）、寺崎研究員（センター）、湊野社長（陶土製造業）、そして私の4名による「天草陶石の危機的状況について」のパネルディスカッションを通じて業界の皆様の問題提起をした。昨年5月ごろであった。それから今年2月に、天草陶石研究会御一行様を有田へお迎えして視察研修会と懇談会を開いた。産地はひとつという合言葉の元に返礼を約束して今日の行動につながったのである。

過去において、天草陶石採掘現場を視察するたびに、劣悪な環境下で働く人たちに胸を痛めていた。高齢者が多くて先細りの感があったのである。同時に無尽蔵と言われる巨大な鉱脈を目の前にして安心するわけにはいかない。陶石の鉱脈にたどり着くまでに多大な無駄な作業を余儀なくされる。岩盤を砕く危険な作業、膨大な泥の除去作業など、命がけの作業現場を目の当たりにした。一塊の土を作るまでにどんなに大きな代償を払っているのか！宝の山、世界一の山と言いながら安直に陶土を使用していないだろうか！と自ら反省をしながら陶土と向き合うようになった。私のモノづくりへ大きな衝撃と示唆を与えてくれた。このようにして量から質へモノづくりへの転換が始まったような気がする。それからもたびたび窯元の仲間や工房の細工場研修で訪れた事はあったが、今回の視察は私にとってテーマを設けて出かけていったのである。

私の目的は、2日目（6月13日）如水館陶芸研究所の視察であった。今年2月、天草陶石研究会一行の中に、2人の若い明るい中国人がいた。幸い私の前に席があり、懇親会の間彼らと情報交流をした。通訳の人も入っていただいて、有意義な話し合いの場になった。2人は良い環境で毎日好きな陶芸に打ち込んでいるという話を聞いて、生き生きとした表情に強くひかれ、是非彼らを訪ねてみたいと思った次第である。同時に若い中国の陶芸作家達を誰がどのようにして受け入れているか大変興味があった。私の強い要望を聞き入れてもらって、センターの一ノ瀬さん、事務局の筒井さんがその場を作って下さった。

如水館に着くや否や、官の生涯学習センターを思わせるような立派な施設と天草湾を一望できる絶景に感嘆した。早速社会福祉法人慈永会理事長永野義孝さんの挨拶に耳を傾けた。「医療を通じて地域の人達との交流の場として文化施設を併設した。図書館、画廊、陶芸教室も含めてメセナ事業である。戦後敵国の日本人子女を養育した広く深い慈悲の心に触れて、私にできることで着手した。」と淡々と語られる一言一句が心に響き、大きな震えを感じた。さらに私は質問を続けたかったけれども、言葉にならなかった。世界一の陶石と世界一の技術者と芸術家、これ以上の組み合わせがあるだろうか。そのつなぎの役目を担っておられる永野義孝先生の肥後もっこす魂に触れ、尊敬の念を禁じえないのである。中国陶芸界とますます交流を深めていって、有田焼の大先輩に敬意を払いたいと思う次第である。

※写真は如水館





天草陶石採掘現場より



取材ラッシュ！

最近雑誌の取材を受ける機会が増えてきました。しん窯青花ブランドを発表して今年で33年目です。お客様に支持されたおかげであると喜んでおります。そして毎日手技を駆使して作り手の心をお届けしようと、職人魂を胸に秘めながら切磋琢磨をしております。一度工房見学ややきもの体験にお出かけ下さいませんか。



作陶風景をご覧いただけます
(平日および稼働日のみ)

職人さんのひとりごと

～第16回・金子晴子さん～



社長夫妻が新婚1年目の時に入社し、あっという間に来年は還暦です。

最近、奥さんとよく当時のことを懐かしく思い出し、笑ったり涙を流したりして語っています。